

飲み会の話題

福田浩尚

先日、大学時代の友人と呑んだ。二人とも、古希に近い。このとしになると、一杯はいつたときの話題は、病気の話とかお墓の話が多い。この友人ともお墓の話になって、なんでも彼はこちらのほうに最近お墓を作ったそうである。彼とは郷里が一緒なのだが、両親も亡くなったので向こうを引き揚げて近くにお寺とお墓をつくったという。

もともと、実家は曹洞宗なのだが、新しいお寺は、法華ということになったそうだ。本人は宗教は、特に気にかけてないということだった。私自身はまだお墓もお寺も準備していない。この友人の場合は、ご両親の外に奥さんを早くなくしていたので、その供養もあつてちゃんとしたお墓を建立したらしい。この私についていえば、両親は郷里の昔からの先祖代々の墓とお寺があるので、自分のことだけ考えればいい。女房もまだ健在である。郷里のお墓には入れないが、自分と女房が死んだあと入るところだけを考えればよい。

それにしても、死んだあとのことにお金を掛けることになんの意味があるのだろうか。私みたいな、社会にとつてなんの貢献もしていないいわば無価値の男は、死後もそれなりにふさわしい待遇をされて、粗末で小さいもの、場合によってはお墓なんかなくてもいいの

ではないかと思っっている。日本人が葬式にかける費用は、平均して200万円程度でこれは他国に比べて倍くらい多いそうである。葬式費用は、キリスト教が一番安い、仏教は総じて高く、その中では、法華教が安いということの前に聞いたことがある。私はそれで

は、今からキリスト教徒に改宗しようかなと思ったほどだ。この私の友人の場合は、曹洞宗から日蓮宗に切り替えた。これは経済的な理由というよりも彼とか私が住んでいる千葉県は、日蓮宗が多いという理由によるものらしい。我々日本人にとっては宗派、もつといえれば宗教などどうでもよいと考えているのは私だけであらうか。

しかし、ここで思うのはなぜ、お葬式や人の死にかかわることで宗教が登場しなければならないのだろうかと言う疑問が生じる。もともと、宗教というものは簡単に言えば人々の心の悩みを救ってくれるために生まれたものだと考えている。私のささやかな知識で言えば、お釈迦さんの教えだってもつと哲学的な深い人間性に対する思索があつて生き死にのことを単純に論じているものではない。お釈迦さんが死後について語っていることは聞いたことがない。古の哲人、たとえば孔子にいたつては、「私は生を知らない、まして死をや」と弟子に訊かれて答えている。(注)

人間にとつて、最大級の悩みは、死であることは分

かる。だからといって、ありもしない「地獄」とか「極楽」といった架空の世界を勝手に作っていいものだろうか。これらの世界は、釈迦やえらい哲人が作ったものではなく後世のなまぐさ坊主の類が捏造したものにちがいない。人間の個々の悩みに対して、反省やなぐさめを与えるもので、いわば便法であれば、まだ、許されてもよい。しかし、これが、金儲けや坊主の出世や利得に利用されるとなると、決して許されないことになる。仏教では、故人になると戒名というものをつける。この戒名には、高級なものとそうでないものがある。あつて坊主に対するお布施次第で決まるといふ。高いものになるとウン十万円もするといふ。いったいこの戒名に位が高いものと低いものがあるといふことが、お釈迦さまの宗教思想にあつたものだろうか。故人に対してはできるだけのことをしてやりたいと考えるのが、肉親や残されたものの人情である。これを利用して利をむさぼるなどと言う行為は、人間の心の弱みにつけこむ卑劣な行為と言わざるをえない。やっていることはオレオレ詐欺となんら変わりはないであろうか。

仏教だけを問題にしたが、キリスト教だって、同じようなことがあつた。免罪符というものを売り出して多額のお金を僧侶に払えばこの世の罪は消え天国へいけるといふ行為が、協会の墮落行為として宗教改革の原因となつたことは世界史で習つたとおりである。このように総じて宗教というものが、人間の死に関与してよからぬ影響をあたえてきたのも事実だと思う。もし。宗教が人間の死についてもっとかかわりたいといふならば、こんな戒名や免罪符のようなペテン行為は

やめて真剣に取り組む必要があるろう。

現代はコンピュータが発達し情報化社会が歴史上、例をみないほどである。もし、本人が亡くなったあとでも、本人の足跡を残しておきたいというならば、メモリーとして保管しておくこともそう難しいことではあるまい。故人の生前の映像や音声やあるいは文章などを保管しておくことも容易なことだと思う。また、お墓にしても、広い場所をとったり立派な墓石でなくても、アパート形式の集団墓システムも可能はずである。このようなことは、個人によって希望がそれぞれ違うので、強制すべきものではあるまい。だが、種々選択肢はあつてしかるべきと思う。

葬式や戒名やはたまた墓石にお金をかけるならば、もつと生きてる人々のために、例えば恵まれない子供たちの基金に寄付するとか、そういう使い方のほうが、ずっと有用だと考えるのは私だけであろうか？

終わり

2010年11月

(注) 論語 先進篇

敢問死、曰未知生、焉知死

「生についてまだよくわかってないのに、どうして死のことがわかるものか」とある。